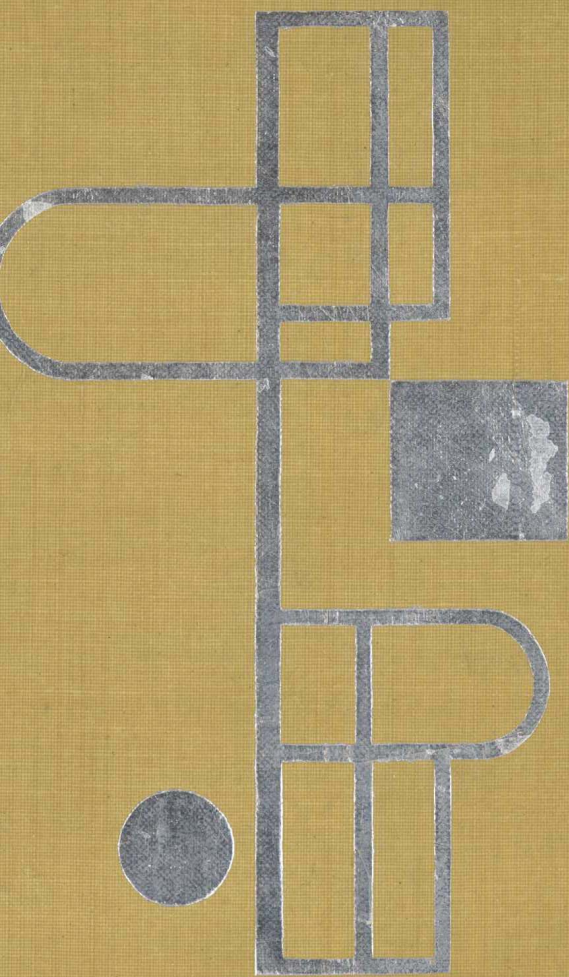


小宮 山内 杏太郎  
吉井 太 勇 集

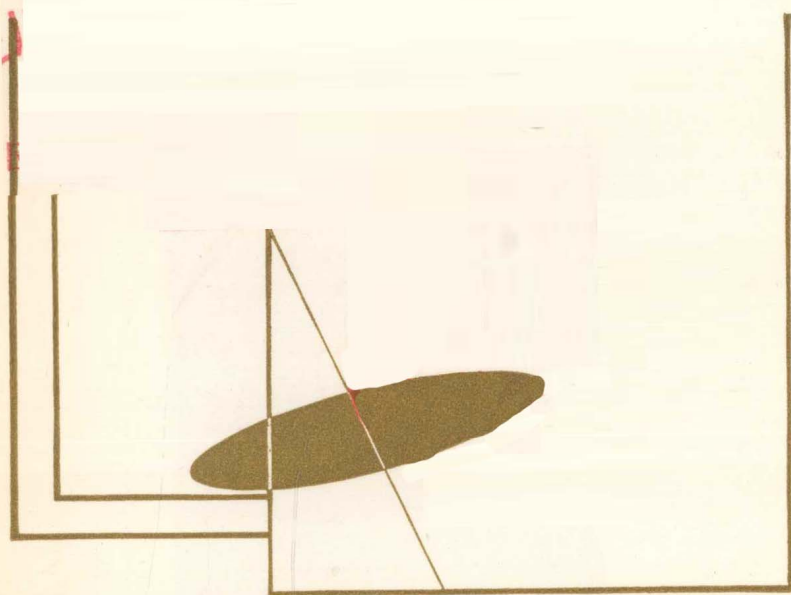


現代日本文學全集

17



薰郎勇  
内太  
山空  
山下井  
小木吉  
集



筑摩書房版

小 山 內 薰  
木 下 奎 太 郎  
吉 井 勇 集

昭和三十一年四月一日 印刷  
昭和三十一年四月五日 發行

著 者

小 山 內 薰  
木 下 奎 太 郎  
吉 井 勇

發行者

古 田 晁

印刷者

草 刈 親 雄

發行所

筑 摩 書 房

東京都千代田區神田小川町二ノ八  
〔電話〕東京二九局(29)七六五一(代表)  
振替 東京 一六五七六八

製 版 株 式 會 社  
印 刷 中 央 製 本 印 刷 株 式 會 社  
本 中 央 製 本 印 刷 株 式 會 社

小山内 薫集 目次

大川端 ..... 五

日本演劇の將來 ..... 二四

第一の世界 ..... 二二

木下本太郎集 目次

綠金暮春調 ..... 一四二

荒布橋 ..... 二〇八

天草組 ..... 一四二

安土城記 ..... 二二六

秋風抄 ..... 一四三

少年の死 ..... 二二九

綠金暮春調 ..... 一四七

食後の唄 ..... 一五七

クウバ紀行 ..... 二四四

南蠻寺門前 ..... 一八五

國字國語改良問題に對する管見 ..... 二五二

和泉屋染物店 ..... 一九六

すかんぼ ..... 二五九

吉井 勇集 目次

酒ほがひ	二六五	長谷詣	三七七
人間經	二九〇	蝦蟆鐵拐	三七七
天彦	三三二	東京・京都・大阪(抄)	三〇〇
小しんと焉馬	三九七	解説	四三二
小山内薫の生涯とその作品(戸板康二)	三九七	年譜	四三〇
木下柰太郎の回憶(日夏耿之介)	四〇三		
歌人吉井勇(前川佐美雄)	四〇六		

装幀 恩地孝四郎

小山内  
薰集

今秋の半着

宿瓦

福山市東町

ヒガシ

秋自家旅館

名

小常著

今から七年前——丁度日露戦争が済んだ年の秋だつた。久松町の明治座に愛國婦人會の慈善演藝會が三日ばかり催された事があつた。

その二日目に正雄は龍閑櫓の伯父さんに連れられて、見物に出かけた。菊の匂の何處からともなく漂つて来るやうな如何にも好い日和で、正雄の制服姿も正雄の伯父さんの唐棧拵へも秋の日を受けて鮮やかに光つた。

明治座へはひると、白襟に細い金鎖をかけて裾模様を着た貴婦人といふ人達が、赤だの白だの紫だののリボンを胸につけて、頻に廊下や棧敷を斡旋して歩いてゐた。

正雄は伯父さんとたつた二人で一間の土間を占領した。伯父さんが芳町方面への義理で引受けた切符の数は四枚だつたが、外に來る人が誰もなかつたのである。

「菊畑」の芝居があつた。智恵内はその時分の薙升、鬼一はその時分の時藏、丹海は先の肥つた荒次郎だつた。紙で拵へた黄菊白菊、白と藍との市松の日除障子、青竹の床几、智恵内の銀

の毛拔、鬼一の鳩杖、皆鶴姫の赤い袂、かういつた色と形とは芝居好きも正雄を喜ばせた。

併し、この日は芝居よりも正雄を喜ばせたものがある。それは芳町のお酌の踊であつた。本花道と假花道から揃ひの友禪を着て、揃ひの銀のびらびらを挿したお酌が八人宛出て、聯隊旗をかいた團扇太鼓を一緒に鳴らしながら、元祿踊式に手足を揃へて踊るのである。

正雄は子供の時分から團十郎や菊五郎の踊を見てゐるし、藤間や花柳の好い師匠の踊も見てゐるので、まだ身體の自由に動かないお酌などの踊を見て感心するわけではないのである。正雄が喜んだのは唯綺麗だからであつた。

正雄は山の手の或藝者屋町で育つた。正雄の育つた屋敷は藝者屋や待合で取り巻かれてゐた。彼は子供の時から藝者やお酌は澤山に見た。けれども、その邊の藝者やお酌は正雄の心に何等の夢想をも起させなかつた。正雄は彼等を下女のやうに見もし思ひもして來たのである。はじめに見た下町のお酌。しかも名に聞いた芳町の、中でも美しいのをすぐつたのもあらう。兩花道を合せて十六人、賑かな鳴物に拍手を合せて、美しい顔を赤らめもせず、三十二の袖を繰かすまばゆさ。

山の手のそれとは彫が違ふと思つた、繪の具が違ふと思つた。さう思ひながら、正雄は兩腕を間狭に凭せて、瞬きもせず左右を交る交る見た。

兩方から來たお酌達は、舞臺で入れ違ふと、

一齊に後向に坐つて肌を脱いだ。縮緬の襦袢にも聯隊旗の模様が赤く染めてあつた。

踊つ子はてんで小さな日目の丸の旗を持つて、又一踊り踊るのであつた。

正雄は上手から三番目にゐたお酌を中でも一番美しいと思つた。

髪の毛が黒く豊であつた。鼻の高きに過ぎないのも愛嬌があつた。夢を見てゐる人のやうな口元。黒眼勝な利口さうな眼。態度が横ましやかなので、丈の高いのも憎げではなかつた。

正雄は自分の趣味を殆んど理想的にこのお酌から汲み取る事が出來た。正雄は一旦このお酌に眼をつけてからは、他のお酌には眼もくれずに、唯この一人をのみ見詰めてゐた。再び斯かる機會は無いと思つたのである。この貴き機會を出來得る限り長く深く深く味はうとしたのである。正雄はプログラムを廣げて、そのお酌の名を求めた。けれどもプログラムには唯大勢の名が列んでゐるばかりで、どれが誰だか容易に分からなかつた。正雄は伯父さんに聞いて漸くこのお酌の名を知つた。お酌は新河内家の君太郎といふ、かなり格の好いのであつた。

君太郎の姿は深く正雄の腦裏に刻まれた。正雄は家へ歸つてからも、容易に君太郎を忘れる事が出來なかつた。本を讀んでゐる時も、何か書いてゐる時も、君太郎の眼が始終自分を見てゐるやうに思はれた。

正雄は家にある古い文藝俱樂部を藏から澤山



出して来て、一冊一冊口繪を調べた。殆ど一日掛りで漸く君太郎の寫眞を二枚見つけた。一つは元祿姿をして手に櫻の枝を持ったのである。これは何かの踊の時に撮つたのであらう。一つは恰好の悪い洋服を着て薔薇の匂を嗅いでゐる所である。これは着物を借りて道樂に寫したものであらう。

この二枚の寫眞は少しも正雄に満足を與へなかつた。正雄の腦裏に刻まれた君太郎の空氣は、少しもこの二枚の寫眞には出てゐなかつたのである。

丁度藝者やお酌の繪葉書に下手な彩色をしたのが盛に賣り出される時分だつた。正雄は下町へ出る度に君太郎の繪葉書を漁つた。

襷を掛けて、姉さん冠りをして、箒を持つてゐるのがあつた。

同じ姿で洗濯をしてゐるのがあつた。

ハイカラで机に向つて手紙を書いてゐるのがあつた。

丸髻に結つて裁縫をしてゐるのがあつた。

中でも正雄の氣に入つたのは、頭をハイカラに結つて、陰矢紺の透綾を着て、麻の葉絞りの帯を締めて、しとやかに三つ指を笑いた寫眞であつた。この寫眞に映つて居る君太郎の眼は、如何にも世にへり下つた、少しも思ひ上がることのない眼であつた。

正雄は君太郎に繪葉書の種類の多いのを喜んで、暇さへあれば新しいのを採して歩いた。

正雄の家は家内中芝居とか音曲とか踊とかい

ふもの好きで、色々な藝人が始終出はひりもしてゐたし、正雄自身も芝居の研究が目的で、自分と同一年位な役者とも友達づきあひをしてゐたのだが、おつ母さんがひどく嚴しいので、まだ悪所とか盛り場とか言ふ所へは一度も足を踏み入れた事がなかつた。

従つて、正雄は君太郎を世にも愛しい者には思つたが、これに近づく手段などを講じた事は一度もなかつた。これに近づく手段があらうなどは夢にも思はなかつたのである。

正雄は堅氣の娘を慕ふやうな心持で、君太郎を慕つたのである。正雄は唯繪葉書の一枚一枚と殖えて行くのを樂みにした。

次の年の夏に、正雄は學校を卒業した。學校を卒業すると、龍閑橋の伯父さんの世話で中洲の或芝居へ作者見習としてはひつた。勿論無給金で、交際費は自分から持ち出すのである。

正雄は芝居のあいである内は、毎晩毎晩遠い寂しい山の手から車だの電車だのと色々に乗りに繼いで、この大川の川下の、淫らな島へ通ふのであつた。

中洲の芝居の左側には銘酒屋のやうなものも幾軒か列んでゐた。白粉を眞白に塗つた女が長火鉢の前に寝をべつてゐたり、門口へ出て帽子のない男と立話をしてゐたりした。

芝居の右側には待合が列んでゐた。立派な門構で供待などの出来てゐるものもある。いきなり格子戸で、長火鉢や階子段が外から見えるやう

なものもある。夜になると電話が方々でちりんちりん鳴る。美しい女を載せた車が、好い匂ひを振り撒きながら、頻に出たりはひつたりする。

芝居の中は更に艶がしかつた。

魚河岸の美しい娘で、毎晩のやうに来るのがあつた。役者は入れ交り立ち交りそこへ挨拶に行つた。中には暫く一緒にはひつて、自分の仲間のしてゐる芝居を見てゐるものもあつた。この河岸の娘と張り合つて、外神田から来る請負師の娘があつた。ここへも役者が幾人も挨拶に来る。娘の場所は水菓子だのお菓子だのの使ひ物でいつも狭くなつた。

若い藝者も澤山に來た。東の棧敷の藝者と西のうづらの藝者とが手の暗號で話をする。扇子を口へ當てて艶かしく笑ふ。

舞臺の役者も特に見物の一人の顔を見て、笑つたり妙な眼つきをしたりした。役者の眼の行く所にはきつと若い女があつた。

その頃は樂屋内がまだそんなに嚴しくない時分だつたから、河岸の娘や外神田の娘は、よく茶屋の男に案内されて、座長の部屋へ來た。そして、座長が大きな鏡に向つて、兩手でべたべた顔を拵へるのを飽きずにいつ迄も眺めてゐた。下廻りには又下廻りで、樂屋の階子段の下まで来て待つてゐる女があつたり、裏口の暗い所で手招きをしてゐる女があつたりした。

正雄は毎晩のやうに待合の名や藝者の名を耳にした。今夜は何處へ行くの、明日は何處だのと言ふ話ばかり聞いた。

## 二

その頃この芝居へ毎日のやうに来る男の客に木場の或る若旦那があつた。いつも芝居は碌に見ないで、茶屋からずつと樂屋へ通つて、役者の部屋を方々訪ねて歩いてゐた。時には大部屋の眞中に胡坐をかいて、下廻りを相手に冗談を言つてゐた。床山の部屋へ腰を掛けてゐる事もあつた。狂言部屋に坐つてゐる事もあつた。極めて地味な——金が掛つてゐて人眼につかない——装をしてゐて、懐にはいつも澤山金を用意してゐた。

芝居がかぶると、きつと三四人役者を連れて、何處かへ飲みに行く。取巻の藝者と呼んで、寂のある咽喉で一中節を語つて聞かせる。そして役者には一々祝儀を出す——一旦座敷へ呼んだ以上は毎日でも唯は返さないのである。座長と座長の相手をする女形とはこの人から毎晩のやうに何處かへ呼ばれた。

この人の芝居に於ける勢力は豪いものだつた。口番、樂屋番から、大道具、小道具に至るまで、この人を「旦那、旦那」と崇めてゐた。この勢力には流石に河岸の娘も外神田の娘も敵はなかつた。役者は屢々婦人の方を斷つて、この人の座敷へ來た。

一座の愛嬌者に龍井浪二郎といふ役者があつた。元は河岸の魚屋であつたのが、道樂からこの商賣になつたのであつたが、今では三枚目の藝が熟して、一座になくてならぬ人になつてゐ

た。この龍井が殊にこの旦那の鼻根で、何處へ行つて誰を呼ぶ時でも、この男を缺かした事はなかつた。

或晩、この龍井が正雄を小蔭に呼んで、木場の旦那が是非一度あなたに會ひたいと言つてゐるが、會つてくれるかと言ふ。正雄は幾度も顔は見えてゐる人だが、まだ一度も正式に名のり合つた事がないから、一度ゆつくり話して見たいと思つてゐたんだと答へた。實は今日會はせたいんだが、今日はゆつくりと言ふわけには行かない。この幕合に一寸行くんだからと龍井が言ふ。では、それでも好いが、一體何處へ行くんだと言ふと、つい濱町の岡田だと言ふ。

その晩は雨が降つてゐた。二人は帽子も冠らずに、相合傘で芝居の裏口を出た。正雄は料理屋といふものも、まだ好く知らなかつた。物心が附いてからで覺えてゐるのは、十一の歳に龍閑橋の伯父さんに連れられて講武所の何とか言ふ家へ一度行つた時の事である。その時正雄は手水に立つて、手を洗ふ時、藤色の着物を着たお酌に水を掛けて貰つて、眞赤になつたのである。その時分から見れば、見聞や讀書で、もう大分度胸は出来てゐたが、それでもまだ中々氣味が悪かつた。

木場の若旦那——姓を福井と言つた。屋號はカネ徳——は六枚折の金屏風を立て廻らして、肥つた、顔の艶々した、頭の毛の薄い、紋附の羽織を着た五十位の男の人と二人で厚い座蒲團に坐つて、高環のやうな一本足の膳を前にして、

笑ひながら盃を口にしてゐた。藝者は年寄つたのが三人來てゐただけであつた。

正雄は龍井の引合せで、始めて福井さんと名のり合つた。隣にあるのは、多分後見か番頭だらうと思つて、正雄は丁寧に挨拶をした。

正雄はその時二十六だつた。福井さんも二十六だつた。同い年だといふ事が大層福井さんを喜ばせた。

正雄は龍井と一緒に直ぐ席を辭した。芝居へ歸つて聞いたら、福井さんの隣にゐたのは辨中といふ太鼓持だつた。

正雄は福井さんと段々懇意になつた。騒ぐ時はどんな眞面目な人でも騒がしてしまふまでに騒ぐ、眞面目な時ははたでどんな騒ぎをしてゐても、少しも亂されずに落ちついて話すと言つたやうに、青年と老人とを混ぜたやうな福井さんの性質が、ひどく正雄の性癖に合つたのである。

正雄は毎晩のやうに芝居で福井さんに會つた。福井さんに會ふのが楽しみで芝居へ通ふやうになつた。福井さんの方でも、芝居へ來ると、きつと龍井に「小川君は來てるかい。」と聞くやうになつた。小川は正雄の姓である。

でも、まだ福井さんは正雄をさう方々へは呼ばなかつた。「失禮だ。」と言ふ風に考へてゐたのである。「誘惑になるといけない。」とも思つたのである。

福井さんは正雄とゆつくり話したい時は、

いつも久松町の八洲亭といふ西洋料理屋か、人形町の玉秀といふ鳥屋へ誘つた。そして成るべく役者の同席を避けた。役者と一座させる事は正雄に對して禮を失すると思つたのである。

それでも、時々前から目を極めて正式に主立つた役者を招待するやうな時には、きつと正雄を呼んだ。かういふ時には、役者も大抵羽織袴で来た。福井さんはいつても正雄を自分の隣に坐らせて、役者を二人の左右に列ばせた。何處までも正雄を主人側にするのである。

かういふ事のある度に、正雄は若しや君太郎に會へやしないかと空願みをするのであつた。けれども福井さんはお酌が嫌ひで、いつも年寄の藝者ばかり呼ぶので、中々さういふ機會には出會へさうにもなかつた。

正雄は段々料理茶屋に親しんで来た。お世辭の好い岡田の上さんにも引合はされた。白い髯の長く美しい百尺の主人にも會つた。小柄で、意氣で、言葉つきの慎ましやかな、一中節の巧い、深川亭の上さんにも會つた。

年寄の藝者にも大分知合が出来た。若い藝者も一人や二人は知つた。けれどもついぞその人達の間に君太郎のキの字も噂をされた事はなかつた。正雄はいつか誰かが君太郎の名を言ふ事があるだらうと思つて、いつも耳を澄まして聞いてゐたが、更にその名の出た事がない。せめて女中の口からでも聞きたいと思つて、女中の話にまで注意するのであつたが、女中も一向その名を口にしない。

もう君太郎はこの土地にゐないのだらうか。あれ程のお酌が一度も話題に登らないといふ筈はない。同性の嫉妬からではないかしら。あんまりおとなしいので話になる種がないのではあるまいか。

正雄は色々と思ひ廻らしたが、自ら人に聞いて見る勇氣はなかつた。

### 三

益の芝居の明く三四日前であつた。

一座の役者は朝から芝居茶屋の二階へ寄つて、「子煩悩」の稽古をしてゐた。そこへ木場の福井さんが遊びに来た。

正雄は役目として、座附作者と座長との間に坐つてゐなければならなかつた。そして臺詞の拔差や人物の出はひりに就いて、一々座長の相談を受けるのである。又自分の方からも座長に注意するのである。五分刈頭で、小倉の袴を穿いた、如何にも書生らしい正雄の風采は、艶かしい役者達の間に異彩を放つてゐた。

午後一時頃稽古が取れた。正雄が階子段を降りると、福井さんが下に待つてゐた。

「小川君、今日は何か用があるのかい。」

「いゝえ、臺詞の直しが少しあるのですが、それは夜遣れば好いのです。」

「ぢやあ、一寸附き合つてくれ給へ。涼しい所へ行くんだから。」

「何處へ行くんです。」

「まあ一緒に來給へ。」

福井さんは茶屋を出ると、どんどん鳥の奥の方へ歩いて行く。正雄は怪訝な顔をして、その後から附いて行つた。

男橋を左に見て、まだ奥の方へ行くと、突き當りに路地がある。路地をはひると直ぐ、右つ側に屋根附の意氣な門があつて、曇硝子の丸い軒燈に「新布袋家」の字が透明に抜いてある。

「君、ここだよ。」

福井さんはやんちゃらしく門の中へ飛び込んだ。正雄も眞似をするともなく、數石を二つ三つ飛んだ。格子戸を明けると、龍井がもう來てゐて、支關に笑つて立つてゐた。

綺麗に拭き込んだ氣持の好い家だが、何となく天井が低くて、何處へ行つても鼻が支へさうである。下駄を脱ぐと、女中が忙ててそれを下駄箱へ入れた。正雄は不思議に思つた。

福井さんに案内されて、正雄は階子段を上つた。通された二階は次の間附の十疊位な座敷である。

天井は杉の薄い板で、それに胡粉と青とで夕顔の繪が書いてある。窓の下は直ぐと大川で、障子を明けると、眞夏の日に眩めく水と、眠りながら流れてゐるやうな舟が幾艘か見えた。向う河岸には白い藏が眼を射るやうに列んでゐた。座敷の眞中には桑のちやぶ臺が出てゐた。ちやぶ臺の三方には麻の夏蒲團が敷かれて座蒲團の側に脇息が一つ宛置いてあつた。

「君、誰か呼びたいのがあるんなら、呼び給へ。」  
福井さんは正雄に向つてかう言つた。

「え。」  
と言つた時、正雄の胸は不思議に落ちついてゐた。

「會つて見たいと言ふやうな人があるだらう。それを呼ばうぢやないか。」

「ぢやあ、君太郎と言ふのを呼んで頂きませう。」

正雄は少しも悪びれずに、ずかりとかう言つた。

「新河内家のお酌だらう。へええ、妙な者がお眼に留まつたねえ。」

福井さんにかう言はれると、正雄は急に顔を染めた。

「君太郎さんなら綺麗ですわ。」  
そこに坐つてゐた年増の女中がかう言つた時、

正雄は萬人力を得たやうな氣がした。  
「それに上品ですわ。おとなしくて。」

若い女中も側から助太刀をした。  
「福井さんは好奇心に驅られるといふやうな風で、左右の手の平を擦り合せながら、

「こりや面白い。呼んで御覽、呼んで御覽。」  
と言ふ。年増の女中は直ぐと座を立つた。や

がて階子段の下の方で電話の鈴の鳴る音がした。  
三つの盃を組むやうにして入れた盃洗と、眞

白なお銚子と、鯛煎餅のお通しとがちやぶ臺の上に乗つて。龍井は直ぐと盃の一つの水を切つ

て、福井さんに差した。福井さんは手つきで正雄へ先に差すやうに命じた。龍井は又一つ盃の水を切つて、突と正雄の鼻先へ出した。

「ええ、令夫人君太郎嬢の御健康を祝しませう。」  
龍井の漢語の甚だ危なげなのを笑ひながら、

正雄はおとなしく盃を受けた。龍井は正雄と福井さんに酌をすると、自分でも一つ盃を取つて、

手酌の置注ぎと言ふのをした。  
そこへ髪をハイカラにして、着物を端折つて

来た小柄な若い藝者があつた。直ぐその後から島田に結つて、裾を引いた、眼が大きくて、丈

の高い二十二三の藝者が来た。この二人は福井さんの座敷にはいつでもきつと來てゐるので、

正雄も顔は知つてゐた。唯いつもは年寄藝者の蔭に鼠のやうに小さくなつてゐる二人が、こ

では甚しく荒れ廻るのである。正雄はそれが不思議でならなかつた。

「まあ、先生、よく入らしてねえ。」  
島田が蓮葉らしくかう言つた。

「先生の是非見たいと言ふのがあるんでね。」  
島田の隣にゐる龍井がかう言つた。

「これで中々隅へは置けないのさ。女學生の方では大分経験があるんだからね。」

と、福井さんが言ふと、  
「あら、さう。」

と、福井さんの隣にゐる眼の可愛いハイカラが、びつくりしたやうに眼を剝いて言ふ。

「嘘だよ。莫迦。」  
と、福井さんは窘めるやうに言つて、女の前に盃を出した。ハイカラは少し極りが悪いと言

ふ風で、正雄に氣を兼ねながら酌をした。

正雄は口が利けなかつた。いつもの光景とは大分様子が違ふ所へ、ひどく自分だけが中心になるやうな氣がして、如何にも場打てがしたのである。

それに「先生、先生。」と呼ばれるのも氣になつた。芝居の中で役者の言ふのは、まあ爲方

がないとしても、この内では女中までが言ふのである。「何が先生なのか。先生がこんな

に面喰つてどうするものか。」正雄は腹の中でかう思つた。

階子段に衣擦の音がしたかと思ふと、次の間から「こちら。」と言ふ可愛い聲が聞える。

年増の女中は次の間を覗くやうにして、「ええ、さうよ。」と言つた。それから、正雄の方を振返つて、「參りましたよ。」と、笑ひながら

小聲で言ふ。  
白地の緞に紫の菖蒲を染めた肩上げのある着

物を着て、褪紅色に入つ襦を白く抜いた帯を締めた、髪の毛の黒く美しいお酌が、敷居に手の

指を軽く突いてしとやかに挨拶をした。  
顔を上げるのを見ると、正しく君太郎である。

眼も鼻も口も、舞臺にゐるのを土間から見たのとは違つて、如何にもはつきりしてゐる。眼には黒く深い情を湛へてゐる。鼻には少しも誇らしげな角がない。口は如何にも感じが柔か

で、それでゐて、何處にか梃子でも動かぬ情の硬さが見える。

正雄は強烈な光にでも會つたやうに、どうし

でも眞面に君太郎の顔を見る事が出来なかつた。抑へても抑へても胸が波を打つ。盃を手にすれば盃が震へる。

一座は暫く無言であつた。

福井さんも、龍井も、島田に結つた咲次と言ふのも、ハイカラに結つた花子と言ふのも、居合した二人の女中も、一齊に君太郎の顔をもちつと見た。俯向いてゐるのは正雄ばかりである。

「綺麗だわねえ。」

若い女中が先づ沈黙を破つた。

「好い毛だこと。」

花子が次いでかう褒めた。

「上品ですわねえ。新河内家は子供の装を見立てるのが餘つ程上手なんですわねえ。」

年増の女中が福井さんに向つてかう言つた。

「厭ですわ。皆さんで。」

君太郎は顔も赤らめずに、少し太い聲でかう言ふかと思ふと、空になつたお銚子を持つて、すつと座を立つた。

「成程、藝術家は又藝術家だけの見立をするものだね。」

と、福井さんは軽く冷かすやうに言つて、

「だが、少し柄が大き過ぎる。」

と、叱るやうに付け加へた。

「好い子になりましたね。小さい時は随分貧相な子でしたかねえ。」

龍井は年寄らしい調子で首を振りながら言つた。

「男好きがするのね。」

咲次は龍井の顔を見てかう言ふ。

「中々強さうね。」

花子は烟管をぼんと叩きながらかう言つた。

そこへ又君太郎が新しいお銚子を持つて来た。

一座は又ちよいと白けたが、今度は前程の事はなかつた。

「君ちゃん、この方が大層御執心なんだよ。幾らかお出し。」

と、福井さんが正雄を指して言ふと、龍井は直ぐとその尻馬に乗つて、

「一圓、一圓。」

と叫つた。

君太郎は憤まじやかに笑つてゐるばかりである。

と、

階子段の下から、「咲ちゃん、電話。」と疍走つた聲がする。咲次は直ぐと座を立つた。

暫くすると、「龍井先生、ちよいとお顔を。」

と次の間から女中の聲がする。龍井は座を立つ

と、次の間で暫く女中と話してゐたが、やがて階子段を降りて行つた。

正雄は飲めぬ酒を無理に二三杯引つかけたので、顔が眞赤になつた。福井さんも大分好い機嫌で、下から運ばれる「お料理」を、側から片

附けながら、少し鼻へ掛る寂のある聲で、首を振りながら端唄を唄ふ。

咲次も龍井も下へ降りたざり上がつて来ないやがて花子もみななくなつた。福井さんもお皿やお椀を綺麗にすると、鼻歌を唄ひながら、何處

かへ行つてしまつた。番の女中も消えた。

正雄は君太郎とたつた二人になつた。

「みんな何處へ行つてしまつたんだらう。」

正雄は情なさうにかう言つた。君太郎は黙つて靜に笑つてゐる。

「僕の顔眞赤でせう。」

君太郎は笑つて頷いた。その頷きやうに正雄は妹か姉に見るやうな親みを見た。

「見つともないなあ。」

正雄は恥づるやうにかう言つて、座蒲團を自分で持つて、川に近い窓の側へ来た。窓から下を覗いて見ると、小さな庭があつて、飛石が棧橋へ續いてゐる。棧橋の袂に手入の屈いた青い柳が細い枝葉を水の上に垂れてゐる。庭の隅には紫陽花が瑠璃色に咲いてゐて、龍井らしい笑ひ聲と咲次らしい笑ひ聲が、折々水に響いて聞える。帆を張つた舟が幾つも幾つも川下から登つて来る。水は西日を受けて金のやうに光る。

「ここへ来ませんか。好い風ですよ。」

正雄はやつとの思ひでこれだけ言つた。君太郎は少しも恥づかしがらずに、突と立つて来て、

正雄の直ぐ前に行儀よく坐つた。桔梗の花を畫いた、塗骨の、小さな扇子を使つてゐる。半襟の縮緬にも桔梗らしい花が縫ひになつてゐる。

「君、桔梗の花が好きなの。」

「ええ。」

「僕も大好きさ。花の紫なのと葉の眞青なのとが實に好い取り合せね。」

「ええ。」

「饑ん所に栴檀澤山ありますよ。」

「下町はだめよ。植木が植ゑられないから。」

「君も元は山の手にあるたの。」

「いいえ。」

と言つて、君太郎は謎のやうな笑ひ方をした。そこへ年増の女中が嬉しうな顔をしてはひつて来た。

「まあ、お二人ぎりでお陸しこと。」

女中にかう言はれると、正雄は又かつとした。

君太郎は仄に笑つたきりで、澄ました顔をしてゐる。

「君の名は。」

正雄は女中にかう聞いた。

「名なしの權兵衛。」

「ほんとなにさ。」

「い、ま。」

と、一字一字切つて言ふ。

「お今さん、又來ても好いかい。」

「ええ、ええ、どうぞ入らして下さいまし。」

「ほんとだよ。」

「ほんとですとも。」

「一人で来るよ。」

「ええ、ようございますとも。」

「君太郎さんに……」

と言ひかけて、正雄は後が言へなくなつた。

お今は後を引き取つて、

「に、會ひにせう。」

と言ふ。

「にぢやない、とだ。と、話をしにさ。」

と、正雄は少し碎けて来た。

正雄は餘り戯け過ぎたかと思つて、恐る恐る君太郎の氣色を窺つた。君太郎は前と同じやうに、靜に眼元で笑つてゐた。

正雄は君太郎に會ふまでは、随分いろんな話をするつもりでゐた。演藝會の時の話もしようし、繪葉書の話もしようと思つてゐた。けれど會つて見ると何一つ言ふ事が出来なかつた。

氣心の知れない人に、あんまりいろんな事をしやべつてしまつて、若しや厭がられたら恥だと思つたのである。こつちにはかり心があつて向うに心がないのなら、こつちにも心がないやうにして附き合ひたいと思つたのである。

一旦斷割つた胸の思は再びおのが胸に收められるものではないと思つたのである——正雄の心は青年の誇と強い自我とに充ち満ちてゐた。

お今は頻に君太郎を褒める。

「ほんにと感心な人なのですよ。お父さんには孝行ですし、御主人にも中々好くするんです。ほんとなあなたの方には丁度好い御相手ですわ。これから始終手前どもでお會ひなさいましよ。」

正雄はそれでも嬉しうに頷いた。それから君太郎の顔をちつと見て、

「さうしませうか。」

と思ひ切つて言つた。

「ええ、どうぞ。」

と、君太郎は平氣で言つて、平氣で正雄の顔を見てゐる。

これがどうも正雄には不満足であつた。さつきから何を聞いて見ても、君太郎は決して恥かしがたり悪びれたりはしない。ずかりずかりとはつきりした返事をする。それが、こつちを信じてゐるやうにも見えるが、又冷淡のやうにも見える。大變打解けてゐるやうにも取れば、ひどく無頓着のやうにも見える。初對面の君太郎は、正雄にとつて一つの難解な方程式であつた。

福井さんが上がつて来た。水でも浴びたと見えて、髪に雫が二つ三つ光つて見える。

「どうですな。大分お話がもてたやうですね。」

と言つて、無理にくつくつと笑ふ。

龍井も扇で膝か何かをびしやびしや叩きながら上がつて来た。これも湯へでもはひつたのか、顔が厭にてかてかしてゐる。

「どうも先生、相済みません。併し、君ちゃんと差向ひか何かで、川の眺めを恣にしたところは又格別でげしたらう。」

と、わざと卑しげな落語家口調で言つた。

正雄はもう何を言はれても平氣だつた。正雄の眼は唯不思議な方程式のみ見詰めてゐたのである。

三人が「新布袋家」を出ると、もうあたりは薄暗かつた。家と家との間から時々見える大川は鉛のやうにどんよりと光つてゐた。

二人は又更に飲み直しの相談をするのであつた。正雄は一人男橋で別れて、座長の臺詞書と

今日與へられた方程式を抱へながら、遠い寂しい山の手へ歸つた。

## 四

正雄はいつの間にか祕密を持つ人になつてゐた。正雄は君太郎に初対面をした明るく日の明くる日から、人目を忍んで新布袋家へ通ひ始めたのである。

正雄は巧に時間を利用した。芝居は大抵夕方からであるのに、早くから用があると云つて、いつも午前の内に家を出た。

芝居の始まるまでは、大抵布袋家で日を暮らした。掛けると君太郎は大抵來た。「約束」の時間によつてかかるやうな時でも、十分なり二十分なり都合して、きつと正雄の座敷へ來るのである。併し、君太郎は正雄にとつてはやつぱり謎であつた。我儘な正雄にとつては自分の好きな人は自分のみの爲に存在してゐなければならなかつた。藝者とかお酌とかいふ者が一晩に四つも五つも座敷を勤めなければならぬといふやうな事は正雄には分らなかつた。毎日出掛けて、毎日會へるといふのは、「旦那」とかいふ者でない限り、餘程有難く思はなければならぬのがこの社會の常であるのを、正雄は唯當り前の事だと思つてゐたのである。そして已むを得ぬ時間の都合で君太郎が早く歸るやうな事があると、正雄は直ぐと厭な顔をして、世にも人にも捨てられたやうに思ふのである。

偶には君太郎の全く來られない事があつた。

さういふ時、正雄は怒つてとんだん歸つてでもしまふかと言ふに、決してさうではなかつた。來て直ぐ歸るといふ時よりは、初めから來れないと分かつた時の方が諦めが好かつたのである。いつもさういふ時には君太郎の妹分までお酌にも出ないお蝶さんといふ小さな子を特に呼んで貰つて、埒もない話をして歸るのである。お蝶さんの装はいつも君太郎と同じやうな好みであつた。顔は丸く肥つてゐて、君太郎のやうな感じはしなかつたが、着物や帯が似てゐるので、正雄はこの子を君太郎の人形のやうに思つて可愛がつたのである。

正雄は相變らず福井さんに方々へ呼ばれた。一度布袋家へ一緒に行つてからは、福井さんも正雄に對して餘程遠慮がなくなつたのである。併し福井さんはもう二度と君太郎を呼ぶやうな事はなかつた。又君太郎の噂をするやうな事もなかつた。何處かつんとした所のある君太郎は、氣さくた福井さんの趣味に合はなかつたのである。それに、「何だ、あんな子供が。」と莫迦にするやうな氣持もあつたのである。「小川君が何か言つてゐるが、小川君だつてあんな子供を眞劍にどうのかうのと言ふ譯でもあるまい。」といふ風に極軽く見てゐたのである。

正雄は却つてそれをしあはせだと思つた。正雄は福井さんの前では、もう君太郎の事などは忘れてしまつたやうな顔をしてゐた。たまたに花子や咲次に冷かされるやうな事があつても、正雄は顔も赤らめなかつた。そして、隠れに隠れ

て君太郎の顔を見に行つた。福井さんは其頃少し布袋家に遠のいてゐるのであつた。

正雄は段々大膽になつた。初めは晝の外決して行かなかつたのが、夜も時々行くやうになつた。芝居のかぶる少し前に小屋を出て、電車になくなる少し前まで、島の奥で暮らすのである。或晩、君太郎は自分がお酌になつた時の物語をした。

君太郎の話によると、君太郎の家は本所の横網で、親父は物堅い繪かきである。君太郎は名をお君と言つた。入つのに鞆を肩に掛けて、學校からの歸り道に、同向院を通り抜けると、袖の長い紫縮緬の羽織を着て、眞赤な半襟を掛けた、十二三の綺麗なお酌が、鼠小僧の墓の前にしやがんで、白い小さな兩手を合せて頻に何か拜んでゐた。お君はそれを見て、お酌といふものは實に綺麗なものだと思つた。さう思ふと、直ぐ自分がお酌になりたくなつた。

家へ歸つていきなり鞆を投り出すと、黙つて家を飛び出して、唯一人で人形町の親類の家まで來てしまつた。その家に大層お君を可愛がるおばあさんがゐた。お君はそのおばあさんに「お酌にしておくれよう、お酌にしておくれよう。」と、朝から晩までねだり續けにねだつた。おばあさんは途方に暮れて、では兎も角も知り合ひの藝者屋があるから、そこへ連れてつて遣らうと言ふので、連れて行つたのが今君太郎のゐる新河内家である。

おばあさんは、なあと二三日すればきつと飽きて歸つて来るだらうと高を括つてゐた。ところがお君は中々歸つて来なかつた。お君は藝者が三味線や歌の稽古をするのを一日飽かずに聞いてゐた。お酌が下方や踊を浚ふのを一日飽かずに見てゐた。そして早く自分も稽古に遣つて貰ひたいと藝者屋の主人に迫るのであつた。

かういふ事情からかういふ商賣になつたので、主人に對して大した借金があるといふ訣ではなから自然主人にも大事にされて来た。それでも、さて自分がなつて見ると、決してはたで見る程美しい商賣ではない。自分はまだ少しもこの商賣を永く續けたいとは思つてゐないと、君太郎は年には老せた口の利きやうをするのであつた。

君太郎がお酌になつた動機は、正雄の頭の中の君太郎を餘計に美しくした。正雄は紫の袂を惜しげもなく地べたに引き摺つて、鼠小僧の墓の前に跪くお酌を、君太郎でない他のお酌にして考へる事が出来なかつた。君太郎の物語が正雄の頭の中に描いた繪では、袍をさげて墓の前のお酌に見惚れてゐる子が君太郎ではなくて、その子に美しく唐人鬘を見せて、一心に手を合

はすお酌が君太郎であつた。その晩は向う河岸に祭でもあると見えて、いつもは早く戸を締める家々の障子に、遅くまで灯があかるく見えた。折々は人影もうごめいて、靜に物語る追憶の樂しさも思はれた。

正雄は君太郎と膝を列べて、水に映る向ふ河

岸の灯を、夜の更けるまでちつと見てゐた。

君太郎に會へないで歸つた明くる日は、きつと君太郎から詫言るやうな葉書が来た。會つて歸つた後でも、一日行かないと、きつと葉書が来た。葉書が来ると、正雄は直ぐ返事を出した。そしてまだその返事の向うへ届くか届かない内に、正雄はもう新布袋家で、君太郎と差し向ひになつてゐた。

「葉書有難う。僕の葉書見た。」

「いいえ。」

「ちや、まだ届かないんだ。もう確に着いてる時分だから、歸つたら見て見給へ。」

「ええ。有難う。」

かういふ對話をして、家へ歸ると、正雄は直ぐ君太郎の所へ、きのふの葉書は届いたかといふやうな事を書いた葉書を出すのである。それと行き違ひに君太郎の方からも、「先程は失禮しました。おはがきは確に頂きました。」といふやうな禮の葉書が来るのである。正雄は葉書一枚のやうな物でも問題にして、寸時も女との消息を絶やさないやうにするのであつた。

君太郎は大抵繪葉書を用ひたが、その繪葉書は多く没趣味なものであつた。月に薄だの、波に千鳥だのを漆で下手にかいたのが、その頃はやつた。君太郎は多くそれを用ひた。自分では大層しやれてゐると思つたのである。

正雄は大抵君太郎に遣る葉書に「小川生」と名を署した。隠し名などをしたところで、迎も

相手に分かるまいと思つたからである。ところが君太郎はそれをその儘、いつも「小川生様」として葉書をよこした。正雄が、人によこす時に生の字を附けるものではないと教へると、その次は「小川先様」と書いて来た。先生と書かうとして、生の字を落したのである。正雄が又それを言ふと、その次の葉書には「小川生先様」として、生と先との間に返り點を打つてよこした。君太郎の頭には深く「小川生」といふ三字が染み込んでゐたのである。正雄が教へてから三度目の葉書に、やつと君太郎は本當の事を書いて来た。この無知を又正雄はひどく可愛らしく思ふのである。

君太郎の葉書には、まだ一つ可笑しな事があつた。君太郎は何區といふ上に、きつと「當」といふ字を一字添へた。當幾日といふ風に、當何區と書くのである。正雄は始終それを不思議に思つて、或時君太郎に聞くと、家の姐さんがさう書くんですものと言ふ。妙な癖もあるものだと思つたが、これは別に間違ひと言ふ程の事でもないからそれつきり黙つてゐると、君太郎は相變らず當何區と書いてよこす。それが、如何にもかう書くのが本當だと堅く信ずる所のあるやうな筆つきなのである。正雄はそれを又可愛いと思つた。

君太郎の字は餘り巧くはなかつた。やはり普通のお酌流藝者流であつた。それでも正雄は割合に巧いと思つて、或時君太郎にかう聞いた。「葉書は君みんな自分で書くの。」



「いいえ。」

「ちやあ、代筆。」

「ええ。書けないんですもの。」

「誰に書いて貰ふの。」

「家にゐる人に。」

「いつも手が同じだけれども、しよつちゆう一つ人に書いて貰ふの。」

「いいえ。」

君太郎の答はいつも正雄を迷はせる。正雄は君太郎の葉書を大事にして好いんだか悪いんだか分からなかつた。代筆を大事にしても爲方がないと思つたのである。併し葉書の文句には自分でなければ書けないやうなことも稀には書いてあつた。

君太郎と正雄とは餘所目にも睦しい程の仲になつたが、それでも君太郎の心はやつぱり正雄に分からなかつた。

「嫌ひかい。」と聞けば、「いいえ。」と答へる。

「好きかい。」と聞けば、「ええ。」と答へる。が、唯それだけである。それ以上にはどうしても意中を打ち明けない。

お今などの話を聞けば、正雄に會ふのを唯一に楽しみにしてゐるやうだが、それは當になつたものではない。正雄にさへ意中を打ち明けぬ程利口な人が、どうして餘所の人にそんな浮いた事を言はう。お今は人を喜ばす爲に好い加減な嘘を言ふのだと正雄は思つてゐた。

併し、藝者といふ者は呼びさへすれば、きつと来るものではないといふやうな事も段々正雄

に分かつて來てゐた。従つて、忙しい君太郎に、行けば大抵會へるといふ事が、少しは有難く思へて來た。正雄は君太郎を心なしとは思へなかつた。

それにまだかういふ事もあつた。君太郎は他の座敷へ行くと、決して物を言はない。「お座敷」だけで一緒になるやうな朋輩は、みんな君太郎の事を無口だとか偏屈だとか言つてゐる。それは正雄も聞いて知つてゐる。その君太郎が正雄の座敷では不思議によく話をするのである。これも正雄には唯でなく思へた。

或時、正雄と君太郎とはこんな話をした。「いつまでも君はこの商賣をしてゐるつもりかい。」

「いいえ。いつかもそいつたでせう。」

「ちやあ直ぐ廢したら好いだらう。」

「さうは行きませせんわ。又色々都合もありますから。」

「だつて借金なんかないんだらう。」

「でも、子供の時から色々世話になつてますから。」

「ちやあまあ、恩返しだけの事が出來たら廢すと云ふのかい。」

「まあさうよ。」

「で若し廢したとしたら、君どうするの。」

「家へ歸ります。」

「それから。」

「家の用をしますわ。」

「一生。」

「ええ。」

「お嫁には行かないの。」

「貰つてくれ手がありませんわ、一旦かういふ商賣をしたものは。」

「若し貰ひ手があつたら。」

「そりやあ參りますわ。けれどもそんな人はありませせんわ。どんなに身持を好くしてゐたつて、藝者だつたと言ふだけで、もういけないんですもの。」

「そんな事があるもんか。」

「いいえ、さうですわ。以前の品行はどうでも堅氣の娘さんなら、えはつてお嫁に行けるのよ。吾々はだめよ。」

「それでも若し本當にお上さんにすると云ふ人があつたらどうして。」

「ですから、お上さんならありますわ。お妾だけは死んでも厭よ。」

「お妾は厭かい。」

「ええ、どうしても厭。」

君太郎は「どうしても」に力を入れた。正雄はそれを又堪らなく嬉しく感じた。

君太郎は「お客取り」を勧められる苦しさを屢々正雄に訴へた。主人から勧められるものではないのである。待合や料理茶屋のお上に勧められるのである。

或時、岡田の直ぐ側の或大きな待合で、かういふ事があつた。座敷へはひると女中も藝者も誰もゐないで、床の間の前に痘痕のある肥つた